

8 ボッカッチョとマルコ¹⁾

<『神曲』から『デカメロン』へ>

天国編第三十三歌、いよいよ見神の願い適って、『神曲』は次のように終わる：

その時、私の心は一瞬の閃光〔恩寵〕に貫かれ、願いは満たされた。その愛〔神〕は、もう私の望み〔知性〕と想い〔心性〕を同じように回していた、太陽とほかの星々を動かすあの愛は。(Par. XXXIII. 140-145)

そして50年、『デカメロン』は次の言葉とともに始まる：

人間的なことです、苦しみ悩む人々に同情するのは。(Pr. 2)。

しかもその「苦しみ悩む人たち」とは、現世の罪と来世の罰ではなく、ほかならぬ恋の苦しみにもだえる、とりわけか弱い女たちのことであった。

「神の愛」から「人間的なこと」、「太陽とほかの星々」から「恋に苦しむ人々」へ、すなわち神から人へであり、舞台もあの世からこの世へと移る。そしてボッカッチョは、この世に生きる生身の人間たちとそこで繰り広げられる営みの草々を、十日百話のうちに可能な限り多様に配した。かくて、ダンテの壮大な三界構造の宇宙は消えうせ、地球は著しく平板なものとなったが、と同時にその封印も解かれ、その地平はキリスト教ヨーロッパの域を超えて、知られる限りの地に広がった。

では、ボッカッチョ『デカメロン』の「世界」とはいかなるものであったか、また東方はいかに登場しどのように描かれたか。そしてそこに、かの書はいかに取り込まれたか。

<チポツラ修道士>

1350年頃のある日、一人の男が世界に旅立つ。その行き先はあの世ではなくこの世、東方、しかもなんと「ボルチェッラーナ」国であった。フィレンツェは聖アントーニオ教団の修道士、チポツラ師である。彼は上司から、「太陽の現れるところ」つまりオリエントに派遣されたのだが、その任務というのは、「ボルチェッラーナの特

権」を獲得することであった。

『デカメロン』第六日第十話、百話の中でも最も秀逸なものとして知られる「チポッラ修道士の話」(VI.10)²⁾は、とこのように始まる。フィレンツェ郊外チェルタルドの善男善女を相手に、いかがわしい聖遺物、天使ガブリエッロの羽を披露してしこたまお布施をせしめようとしたのだが、その羽は知らぬ間に悪戯者によって炭と入れ替えられており、いよいよ御開帳となってそれと気付いた修道士は、顔色一つ変えずにその場を取り繕い、その炭の聖遺物を手に入れた経緯を、東方への旅に託して堂々と語る、というのが舞台設定である。

そこでは、「ポルチェッラーナ」(磁器)は il Porcellana と大文字で始まる男性名詞となっており、東方のどこかの国と想定されている。かの書によって逸早く伝えられた磁器は、中東やエジプトを経て、この頃にはイタリアにもやって来ていた。商社に勤めたこともある作者は、その価値を正しく見抜き、それに東方を代表させたのであろう。「特権を獲得する」とは、とすればそのポルチェッラーナ国の特権、つまり‘磁器の秘密’を探ることになる。「特権」i privilegi には‘特許状’という意味もあり、彼は修道士だから、その国の布教の許可を手に入れる意味も掛けられている。と同時に、東方に向かう彼らの役割がそれだけではなかったように、通商の特権つまり特許状を獲得することでもあった。その獲得を目指すチポッラ(玉葱)士の旅は、次のように進んでゆく。

出発はやはりヴィネーギア(ヴェネツィア)、そこからボルゴ・ディ・グレーチ(コンスタンティノポリス)に渡り、ガルボ王国(モロッコ北部)、バルダッカ(バグダッド)、サルデーニャ、ブラッチョ・ディ・サン・ジョルジオ(ボスポラス海峡)を通って、「メンゾーニャ(虚言)の地」にやって来るのだが、その国では「お金を鑄造せぬまま使っている」。とくれば、すぐ思い出されるのが「紙のお金」であろう。ポルチェッラーナ国の特権(特許状)は、「印を捺すのは全くタダ」ともある。紙幣を最も早くしかも大きく伝えたのもマルコであった。「この紙にはすべて大君の印が捺してある。彼はこれを大量に作らせるから、世界の全財宝がそれで払えるだろう」とある(Ch. 96)。が、それはまた、彼が‘嘘吐きマルコ’あるいは‘百万’として信用されなかった理由の第一でもあった。

次いで、アブルツツィ(アブルツツォ)の地を経て、「毛虫の山」にやって来る。この「毛虫」bachiが桑の毛虫つまり蚕なら、かつてセリカ(絹)の国「セレス」として知られたカタイを指すことになる。が、蚕だという確証はない。かの箇所では、そのお金は「絹を作る虫 vermes がその葉を食べる桑の樹の紙」、から作られるものであることが紹介されていた。そこから、水路伝いに「インディア・バスティナカ」に至る。‘バスティナカ’とはサトウニンジンで、インドに産する胡椒に代表される香辛料のパロディーである。そこでは、「空飛ぶ剪定鎌」(鳥のパロディー)を目撃し、

また「胡桃を踏み潰してその殻を小売していた大商人」と出会う。怪しげな商品を東方産と称して売っていた交易商人たちを茶化したものであるが、かの書の「小ジャワ」(スマトラ)では、インドから持ち来られる「小人」というのは、この島の猿を人間に似せて加工したものであることが暴かれていた。

チポツラ士は、インドでは「インドゥス川」まで至ったが、探していたものつまり例の「特権」が見付からなかったものだから、そこから引き返す。そして、アレクサンデル大王と同じくその川を伝って下り、最後に聖地にやって来、そこでエルサレムの偉い大司教に出会い、その所有になる無数の聖遺物を拝見させてもらう。そしてその中から、最初開帳するはずだった天使ガブリエッロの羽根とともに戴いたのが、これこの「聖ロレンツォが焼き殺された炭」である、と言って恭しく取り出し、かくて無事危機を切り抜けたのであった、という世界漫遊譚のお話である。

この一話には、それまで東方のイメージを形作ってきた諸々のもの、旧新二つの聖書、ギリシャ・ローマの古典、中世アレクサンデル伝説、十字軍時代の聖地巡礼案内、そして13世紀の宣教師たちの東方記などが、全て下敷きにされているのがわかる。主人公チポツラは修道士であり、直接のモデルは、かつて東方に向かったフランチェスコ会修道士カルピニ(東行 1245-47年)、あるいはオドリクス(同 1318-30年)に求められる。彼らもまた、教団の上司から派遣され、名目はもちろん布教だったが、情報収集から軍事偵察まで諸々の任務を託されていた。そしてもう一つは、上からすでに明らかなごとく、マルコ・ポーロであった。

<プレーテ・ジャンニ、グラン・カン>

フィレンツェの貧乏絵描きブルーノとブッフアルマッコは、お人好しの医者シモーネ先生をからかうために、略奪に行こう(女をものにしよう)と、さる集まりに誘うのであるが、そこには「世界中」の美女たちが集まっている:

バルバニッキの女、バスキの女王、ソルダンの妻、オズベックの皇后、ノルウェーカのチャンチャンフェーラ、ベルリンゾーネのセミスタンテ、ナルシアのスカルペデラ、をご覧になるでしょう。私は何を数え上げているのだろう、世界の女王たちが皆おります、プレスト・ジョヴァンニのスキンキムツラまでですぞ。

(VIII.9)

これらの名前のうち、女たちのほうは口から出任せのふざけたものだが、地名のほうはある程度現実が踏まえられている。「バルバニッキ」はバルバロ(野蛮)のもじり、「バスク」は後の「ベルリンゾーネ」(ベルリン)とともに、当時ヨーロッパの僻地の代名詞だった。「ソルダン」(スルタン)は言うまでもあるまいし、「オズベック」

はキプチャク・カン国のウズベク・ハーン、「ノルヴェーカ」はノルヴェージア（F「オロエック」Z「オレカ」）、「ナルシア」はペルシャのもじりであろうか。そしてこれらに並んで、「プレスト・ジョヴァンニ」が登場する。かつて全東方を支配した司祭王、マルコではチンギス・カンと覇権を争った君主（Ch. 65-68）も、ここではその妻「スキンキムツラ」が庶民の好色な欲望の対象である。今の帝王グラン・カンもまた、それから逃れることはできない。

そこで二人は、世界で最も美しい二人の女、「イギリスの女王」と「フランスの女王」を選んだのだが、それに飽きて次に呼んだのは、「アルタリージのグラン・カンのグメドラ」であった。グメドラとは、「そのグラン・カーネの言葉で我々の皇后」を意味する。「グメドラ」はこれまた勝手な造語だとして、「アルタリージ Altarigi」は、グラン・カンとくれば、タルタル tartar が連想される。「グラン・カン」という呼称は本書に始まり、それまでも「カン」はあったが、一般的には「皇帝」であった。あるいはその関係で、歴代のカンが埋葬されるという「アルタイ」山から取られたことも考えられよう。F「タルタル人の大君は皆、アルタイ Altai と呼ばれる大山に運ばれて埋葬される」（Ch. 69）とあった。なお、アルタイの語が見えるのは、当時の書ではそこだけである。

<山の老人>

東方のトポスのもう一つ、「山の老人」も欠けることはない。しかしそれは、ペルシャの高山に隠れ住んで暗殺者を派遣する老人ではなく僧院長であり、その眠り薬で送り込むのは「天国」ではなく「煉獄」である。トスカーナのさる修道院の院長は、フェロンドという大金持ちの田舎者の美しい妻が懺悔に来て、愚鈍で嫉妬深い夫を持った自分は「地獄」の日々を送っていると訴えるのを聞く。前からその妻に懸想していた院長は、好機到来と彼女に愛を告白する。神に仕える者から愛を告白されて仰天している女を僧院長は、「このために聖性が減ることはありません、聖性は魂の中に宿っており、私が奥様に求めますのは、肉の罪なのですから」、と言って説得する。そして、夫の嫉妬深さを治すには、しばらく「煉獄」に行つてその罪を浄めねばならないと言ってその夫を来させ、さる「粉」を飲ませる：

彼は、東方の地でさる大君からもらった驚くべき効き目をもった粉を見付けた。その粉は、かの大君の話によると、「山の老人」が誰かを眠ったまま自分の天国に送り込んだり連れ出したりする時にいつも使うのだそうで、またそれは多くとも少なくとも何ら害にはならず、それを飲んだものを長くあるいは短く眠らせ、その効き目が続いている間は、その者が生きていたとは決して言えなかった。

(III.8)

それを飲まされて眠り込んだ夫を、院長は修道院の穴倉に閉じ込め、目覚めると、死んで「煉獄」にいるのだと思い込ませ、鞭打って嫉妬の罪を浄めさせる。その間に彼の美しい妻とさんざん「天国」を娯しむが、懐妊したことが分かり、夫をもう一度かの粉薬で眠らせて「煉獄」からこの世に甦らせ、家に帰らせる。再び妻と暮らし始めたフェロンドは、自分が妊娠させたと信じ、やきもちも治って、徳高い修道院長に感謝しつつ、生まれた子供とともに三人で幸せに暮らしました、というお噺である。

「山の老人」については、ヨーロッパにも早くから様々に伝えられていたが、眠り薬の使い方とその効能は、本書（Ch. 41-43）とよく一致する。そこでは単に「飲み物」だったのが、ここでは「粉薬を入れた葡萄酒」に変わっているのは、‘ハッシッシ’麻薬の噂が伝わったためか、あるいはより物語的效果を上げるためであろう。それを貰ったという「東方の大君」は、本書にのっとればアラウ（フラグ）ということになるが、グラン・カンでもありえる。この一編はまた、ダンテのあの世、天国・煉獄・地獄といったものが、ボッカッチョでは、いかにその聖性を剥ぎ取られて世俗化され、この世の人間のものとなっているかをよく示す。

妻に騙されながらその不倫の相手に感謝するこの夫は、旅人に妻を提供してなお陽気な「ガインドウ」（Ch. 117 建都）の男を思い起こさせる。もう一度引くと：

美しい妻をもっている者は、それを通りすがりの者に自由にさせる。そして商人はその女に薄い布一切れ、おそらく半ブラッチョか何かわずかな値打ちのものを与える。こうして愉しんだあげく、商人は馬に乗って立ち去る。すると男と妻は、これを嘲笑ってその後姿に向かって叫んで言う、「おいお前さん、どこへいくんだい？ 俺たちとどこから持ち去るものを見せてご覧よ、何を手に入れたか見せなよ、さあ追ん出される者よ、俺たちとどこに何を残したか、何を忘れてるかご覧よ！」そして、彼から手に入れたその切れ端を示して、「俺たちはお前さんからこれをもらった、哀れな者よ、なのにお前さんは何も持ち去らないとはな！」とこう彼を嘲り、このようにするのである。

しかし、かのトスカーナの夫は、妻を寝取られたことを知らぬままその相手に感謝する単なる「かぼちゃ頭」（間抜け）でしかないのに対して、このガインドウの夫は、自ら妻を提供し、その後さらに妻とともに相手を哀れんで嘲る。『デカメロン』には、性にまつわる男女のことは全編ふんだんにあるが、多くは上のようないわばノーマルな騙し合いや裏切りあるいは純愛や悲恋であるのと比較して、この夫婦は通常の想像力を超える倒錯した存在である。その地方の交易商人たちの間ではおそらくよく知られた風俗で、様々に噂されていたのであろうが、マルコのノートあるいは持ち帰った書き物にこの通りあったとは思われないし、文章は精彩があって『デカメロン』のそ

れに少しも劣らない、否よりドラマチックである。創作されたにしても、事実の重みと、それに裏打ちされた迫真性がある。この記事は Z にしかなかった。騎士の戦いを専らとしたルスティケッロにこれが書き得たか、でなければ Z の編訳者は相当の書き手であったとせざるまい。

<絹・香料・宝石>

東方の物産も、もちろん欠けることはない。絹は、もうずっと以前から中東でも生産され輸入されていたこともあって、あらゆるところに登場する。それに代って、当時最も求められたのは香料だった。十人の語り手が起居を共にするフィレンツェ郊外の瀟洒な別荘は、「庭に香るたくさんの他のものの匂いと入り混じって、東方に産したあらゆる種類の香料の樹に取り囲まれている」ようだったし、ペストから生き残った者たちは、「ある者は花、ある者は香り草、ある者は様々な種類の香料」を鼻に当て、その匂いで感染を防ごうとする (I. Intr.)。

ちなみにそのペストも、「数年前東方の地に始まった」とされている。当時の通説では、1346年キプチャク・カン国クリミア半島附近に始まり、黒海経由で48年にイタリアに伝わって来た。それを避けて上の庭園に集まった十人の男女を語り手に、ボッカッチョがこの書を書き始めたのもその折のことであった。作者はその疫病を、いちおうは「神の怒り」に帰すが、しかし、だからといって東方をアンチクリストやゴグ・マゴグに結び付けることはない。実際、かの悪魔の民も、カルピニの化物も、ダンテの地獄の怪物も、オドリクス妖怪も、『デカメロン』では登場しない。それらは超自然的なものであって、ボッカッチョが主題とする「人間的なもの」ではなかったからである。この点では、それらの真実を暴こうとしていたポーロと共通する。サラマンダーは石綿、一角獣は犀であったし、「ゴグ・マゴグ」は、タルタル人の二つの種族「ウングとムングル」であった。

東方のもう一つの特産物は、「宝石」だった。これも『デカメロン』では、富の象徴であるよりは、聖俗問わぬ色ぼけ欲ぼけの対象である。例えば、前のフィレンツェの悪戯二人組みともう一人の悪童マーゾ・デル・サッジョは、やはり単純でお人好しの絵描きカランドリーノをからかうのだが、今度は、フィレンツェ城外を流れるムニオーネ川に見付かる「エリトロピア」という石を取りに行こう、というものであった。それを身に着けていれば姿が見えず、隠れて何でもできて大金持ちになれる、と (VIII.3)。

「エリトロピア *elitropia*」とは血玉髓で、伝承ではそれが魔法の石であった (原義は草花ヘリオトロプ)。宝石の流れる川は、12世紀の「プレスピテル・ヨハネスの書簡」で広まり、すでに東方の驚異の一つとなっていたが、Ch. 55「ペム」と Ch. 56「チャルチャン」(鄙善)で、そこの川では「碧玉 *diaspe* と玉髓 *calcedoine*」が見付

かると、現実のことと記されていた（いわゆるコータンの玉のこと）。「書簡」では、地上の天国から流れて来る「イドヌス」（インダス）なる川に見付かる、エメラルド・サファイア・トパーズ・水晶などに混じって、「サルディウス紅玉髓」の名がある。そうした違いはあるが、フィレンツェの作家は、宝石の流れる川がヴェネツィアの旅人によって証言された、と意を強くしたことであろう。

この頃にはしかし、古代の「絹」中世の「香料」に代って、新たな「宝石」が東方から遣って来つつあった。かの「ポルチェッラーナ」、磁器である。東方の代名詞として使われるまでになっていることは、最初に見た。チポツラ修道士がそんなふざけた話を容易に信じ込ませることができたのも、「エジプトの珍しい品々は、後には大量に流れ込んでイタリア全土に損害を与えましたが、まだトスカーナには少ししか遣って来ていなかったの、この辺の住人にはほとんど何も知られていなかった」からであった。この「エジプト」とは、当時のイタリア諸都市の重要な交易相手マムルークとその中心地アレキサンドリアであり、本書でもザイトン泉州と並んで世界の二大港とされていた。「ティウンジュ」（処州・龍泉）で造られたかの器は、「そこから世界中に運ばれる」とあったが、それが必ずしも誇張でなかったことがここからも裏付けられよう。

<タルタル人>

チポツラ修道士の旅はしかし、ポーロたちと違ってインド止まりだった。アレクサンデル大王の東征が下敷きにされているのと、通念ではまだそこが東の果てだったからであろう。が一度だけだが、「タルタル」つまりモンゴルも出て来る。修道士の従者グッチォは、少し頭のいかれた女たらしなのであるが、その不潔さを喩えて、「タルタルかインドの織物さえとても及ばぬほどたくさん染みや色の付いた上着をまとっている」、と。ただしこれはダンテからであることが知られ、『神曲』には、地獄の怪物「不潔きわまる欺瞞の化身」ジェリオーネの体の模様を喩えて、「タルタル人もトルコ人もこれほど多彩な地と紋の織物を作ったことはない」(Inf. XVII)、とある。本書では、織物は各地で挙げられるが、Ch. 25「バウダック」に、「獣や鳥を縫い込んだ豪華な織物」が出てくる。いわゆるペルシャ絨毯のことで、西方にも早くから知られていた。モンゴルの地では、Ch. 74「テンドウク」で、「見事なナシシとナックの金と絹の織物」があった。が、ボッカッチォもダンテと同じく、そもそも「タルタル」がどこか、明確なイメージや知識があったかは疑わしい。

かくて、100年前カラコルムまでは辿り着いたがそれ以上は足を延ばさなかったカルピニ修道士と同じく、インドまでで止まったチポツラ修道士は、カタイ・マンジには来たらず、それではポルチェッラーナの特権を手に入れることができなかつたのも無理なかつた。ところが最後に、「カタイ」が登場する。しかもそこには、クビライ

と思しき人物が住む。

<ナタンとミトリダネス>

「寛大」をテーマとする十日目第三話、ナタンとミトリダネスの鷹揚さ比べの話は、次のように始まる (X.3) :

確かなことだが、幾人かのジェノヴァ人や、かの地域にいたことのある他の人々の言葉に信を置くことができるとすれば、むかしカッタイオの地に、ナタンという名の、高貴の身分で比べようもないほどの金持ちがおりました。彼は、西方から東方、あるいは東方から西方へと行こうとする者が皆、ほとんどどうしても通らねばならぬ街道の近くに住いを構えていました。

「カッタイオ」Cattaio はいうまでもなくカタイ、R にも一度だけであるが Cattayo がある (Ch. 81)。が、ここでは東の果てではなく、人が往き来する東西の交通の十字路に設定されている。東方にカタイという国の存在することは、14 世紀も半ばとなるともはや確実に知られるに至っていたが、ただインドとカタイの地理的關係、どちらがより東にあるかはまだはっきりとは認識されていなかった。ボッカッチョの場合も、チポツァ修道士の旅に見られたごとく、地球の全体像については中世 TO 図の域を出なかったと見られ、無理ないことであった。がここでは、グラン・カンの領土が東西にまたがるそれほど広大なものだったということであろう。

「ナタン Natan」であれば、旧約聖書に登場するダビデの子にして預言者であるが、ここでは高貴の身の大富豪で :

大きく寛い心の持ち主で、何かをして識られたいと望み、それで、たくさんの親方を抱えていたので、僅かの間に今まで見られたこともないようなこの上なく美しく大きく、また豪華な宮殿の一つを建てさせ、高貴の人々を招いてもてなすのに必要なあらゆる物を、とてもうまく備え付けました。また彼は、素晴らしい大家族を持っており、往来する者は誰であれ喜んで楽しく迎え入れ、もてなしました。そして、この誉むべき行いをずっと続けたので、東方のみならずほとんど西方全体が、その名声で彼を知っておりました。

とくれば、まさしく「かの地にいたことのある」マルコの伝えたクピライが、真っ先に思い浮かぼう。無数の家来 (Ch. 85)、豪華な宮殿 (Ch. 84)、大家族 (Ch. 83)、信じられぬ莫大な富 (Ch. 96)、家臣と祝宴 (Ch. 86-90, 97)、施し (Ch. 99, 103-104) と、全て当てはまる。

と、その名声が、ほど遠からぬ国に住んでいた「ミトリダネス」なる名の若者に伝わる。ナタンに劣らぬ大金持ちだと自負していたその若者は、彼の名声を嫉んでそっくり同じ宮殿を建て、往来する者に大判振る舞いを始める。とある日、一人の貧しい女がその門の一つから入ってきて施しを乞い、恵んでもらって出て行ったが、すぐまた別の門から入って来て乞う。こうして 12 回繰り返し、13 回目に入ってきた時、たまりかねてミトリダネスが、引き返してくるのがちと早すぎるのではないかと文句を言ったところ、女が答えて言うに、「ナタン様のところでは、宮殿にある 32 の門に入って施しを乞いましたが、顔も見ずにいつも恵んで下さった、ここでは 13 回目で顔を知られたうえ、小言をいわれるとは」。それきり、老女が戻って来ることはなかった。

何度も門から入って来る物乞いというテーマは、ペルシャやアラビアの説話にもあるとのことだが、グラン・カン・クビライの施しはそんな程度のもではなかった。「彼の宮廷ではパンを求めてやって来る者に決してそれが拒まれることはなく、米・粟・稗合わせて二万杯がその任に当たる役人によって配給され、与えられない日は一日とてない」、だから人は皆彼を、「神のごとくに崇める」(Ch. 104)。

それ以上に合致するのは、その宮殿と門の多さである。カンバリクの都とクビライの宮殿は、本書でも一つの頂点をなしていた。その都はまた、門の多いことで知られる。F では、中心にある君主の宮殿を二重の城壁が取り囲み、門はそれぞれ 8、その外に市全体の城壁があって各辺 3、計 28 の門があった。R では混乱しているが、内の二つは南面と北面に各 3、一番外側は各面 1、計 16 である (Ch. 84, 85)。実際は、復元図によると、城壁には外城 11・皇城 4・宮城 6 の計 21、宮殿には大明殿 10・延春閣 8 で、それらを入れると総計 39 であった。西方では通常、城壁は一番外の市全体を取り囲む一つだけであり、容れ子型に何重にも取り囲むという構造にはなっていなかったし、門は防御の必要上少ない方がよかった。中心に位置する君主の宮殿は、それ自体が堅固な石造りであって、それがまた別の城壁で囲まれているわけではなかった。ナタンの宮殿の門は 32、城壁があったかは記されていない。

大都を設計した劉秉忠が、それを三面六臂二脚の戦の鬼神、毘沙門天の子哪吒太子の姿に象ったことは本論で述べた (Ch. 84)。ボッカッチョのナタン Natan は、その名がヘブライ語で‘与える者’を意味すること、あるいはダビデの子ソロモンが建設した主の神殿と豪華な宮殿をめぐる神の言葉を伝えたことから、とされるのであるが、哪吒 Na-ta / Ne-zha との似かよいは、偶然にしてはできすぎている。

以下はごく掻い摘むと、老女の言葉に寛大さで勝てないと思い知ったミトリダネスは彼を殺そうとする、がナタンは、自分は他人が欲しいというものは何でも進呈してきた、自分の命が欲しいと言った者は貴方が始めてだ、ならば喜んで差し上げましょう、と言って首を差し出す。この言葉に恥じ入った若者は、自分の命こそ貴方の命に

加えてもらいたいと申し出る。すると老人は、ならば貴方がナタンになってこの宮殿に住んでもらいたい、そうすればナタンはその分長生きして人々に施しをすることができる、と乞うが、ミトリダネスはとても自分はそれに値しないと辞退する、という美しい遣り取りのうちに、この鷹揚さ比べの話は終わる。

この部分のナタンには、マルコのクビライのイメージはない。ここでも、典拠を曖昧にしておくために様々な要素が意図的に混ぜ合わされており、人物としてのもう一つのモデルは、その寛容がヨーロッパでも名高かったイスラムの英雄サラディンだろうとされる。事実、ナタンは頭にターバンを巻いて現れる。何教徒かは記されていない。もう一人の「ミトリダネス」 Mitridanes は同定されないが、名前からすれば、ローマと戦った小アジア黒海沿岸ポントスの王ミトリダテス Mithridates(前 132-63) が近いが、東方との関連では、仏教問答『ミリンダ王の問い』でヨーロッパにも知られたヘレニズム朝インドのメナンドロス王 Menandros が想起される。あるいは、ナタンがサラディンであれば、その好敵手だったが戦って敗れたイギリスのリチャード一世(1157-99)が浮かぶ。この王も、勇猛果敢(獅子心王)にして寛容だったと伝えられる。唯一「弓と刀」で武装していることが、東方とりわけタルタル人とのつながりを想像させるが、本書の中に思い当たるモデルはない。クビライだと、最大のライバルはカイドゥとなるが、寛大さではなく戦いの相手だった。

それはそれで作家の技法の一つだとして、しかしこのナタンの、大富豪でありながら毎日「質素な身なりで一人で散歩する」といった謙虚な生活態度、「自然の流れにしたがえば、人間とこの世の全てのものと同じように、私の命ももうわずかな時間しか残っていないのです」といった無常観、それゆえお役に立つなら「自分の命も喜んで進呈いたしましょう」といった生命観と滅我的な自己犠牲の精神は、十分に東洋的である。晩年の作であるが、『神曲釈義』(1374年)でボッカッチョは、人間の「貪欲から寛容へ」の方向転換は「圧倒的な富が集まった中世の帝国タルタリアに始まる」とし、「タルタル人の皇帝たちの寛大さと富は、我々と比べて信じがたいほどのものである」にもかかわらず、死ぬと「フェルト」の布一枚にくるまれて埋葬される、と記している。タルタル人がいかに質実剛健で困難に耐えるかは、本書でも繰り返し述べられていた。家は木の枠をフェルトで包んだだけのものであること(Ch. 69「風俗と暮らし」)、地祇ナチガイもその布で作られていること(Ch. 70「神・軍・風習」)、もあった。

実は『神曲』にも、そうした東洋人が一人登場する。キリスト教では周知のとおり、洗礼を受けて原罪を浄められていぬ者は、死後全て地獄に堕ちる。異教徒はもちろん、キリスト以前に生まれた者も、異邦の民や未開の人間もである。そこで、キリストを知らないというだけの理由で地獄に落とされるのは正しいか、というもっともな疑問を、ダンテは次のような形で問う：

インドゥスのほとりに一人の人間が生まれる。そこにはキリストについて語る者も読む者も書く者もない。しかし、人間理性に照らしてみても、その思いも行いも全て善く、その業と言において何の過ちもない。ただ、洗礼を受けず、信仰をもたずして死ぬ。その者を断罪する正義はどこにあるのか、彼が信仰しなかったとしても、その罪はどこにあるのか。(Par. XIX. 70-78)

こうした形でダンテは、自分が封印してしまった東方を、わずかながらも開いたのであった。そこ世界の果てインドは、信仰をもたなくとも、また文明的に未開でも、行いと言葉(考え)において正しい人間がいる、と設定するに最も都合のよい所だったからである。とすればそのモデルは、ギリシャの昔から伝えられた無欲で高潔な哲人、バラモンのイメージに求められよう。ボッカッチョのナタン、同じく無欲で高潔な東洋の老人、もその系譜を汲んでいた。

本書でも、バラモンは「アブライアマン」の名で登場していた(Ch. 177「ラル」)。彼らも「絶対嘘をつかず、真実のこと以外口にせず、肉も食わず酒も飲まず、盗まず殺さず、妻以外と交わらぬ」行い正しき人たちであるが、商人であった。が、もう一人、さらに行い正しき人が記されていたのではなかったか。「セルガモニ・ボルカン」、釈迦牟尼仏陀である(Ch. 178「セイラン再」)。王冠も富も女性も全て捨て、この世も捨てて山にこもり、生涯そこで正直かつ清らかに暮らした王子であった。それ故、「彼がもしキリスト教徒であったなら、きっと我らが主イエスキリストとともに偉大な聖者だったことであろう」、とまで。事実、かのダンテのインド人のモデルは、この王子に求められることがある。こうしてマルコ＝ルスティケッロのセルガモニは、ダンテのインド人を経て、ボッカッチョのナタンに繋がっていく。

<「世界の記」>

『神曲』が中世の終曲であったとすれば、『デカメロン』は近代の序曲であると喩えられる。事実それは、ヨーロッパ文学史上最初の近代小説となった。「神」ではなく「人間」を、身分や職業を超えて善であれ悪であれありのままの姿に、しかも教訓や説教を目的とせず、それ自体を描いたからであった。また「世界」を、そうした人間の生きる人種や宗教を超えた共通の場として設定し、しかもその舞台を、ヨーロッパに限らず全世界に求めたからであった。

しかしである、だとすればすでに半世紀前しかもダンテよりも前に、そのことをさらに広く大きく行なった者があったのではなかったか。マルコとルスティケッロである。マルコは、実際に「世界の様々な地を探索した者」であったし、その見聞を基にルスティケッロが編んだのは「世界記」であり、その舞台は文字どおり全世界にわた

っていた。その旅とチポツラ修道士の旅を比べてみるまでもないであろう。そして、そこに登場する人間、生起する出来事、存在する事物は、比較にならぬほど多数・多様かつ現実そのままであった。その事実性は、21世紀の今もマルコをその世界の貴重な証人とさせ、この書をして当時の基本文献とさせるほどではなかったか。

それに止まらない。『デカメロン』では舞台は確かに世界各地に広がり、作者はそこに人種と国籍、宗教と文化、倫理と論理、身分と職業といった違いを超えた様々な人々を登場させたのであったが、しかしその人々の「人間性」心性と知性は、結局はヨーロッパ的な精神の枠を超えるものではなかった。一方この書に登場する者たちは、それぞれの土地でそれぞれの社会と文化の中に生きる、その知性と感性においても様々な異なる人たちであった。上に見たかの陽気なガインドウの夫婦は、その秀逸な一例であり、今なおそこに生きて出会えるとしても不思議ではない。

また前者では、舞台は様々な地に設定されても、描かれるのはそこで行動する人間であり、その行為や出来事であって、その地理や歴史が記されることはなく、その社会や文化の違いが述べられることはなかった。それに対して、この書の中心となっているのは人間よりもむしろそれぞれの地、その都市や社会や事物であり、その描写は今もそのまま通用するほどリアルなものだった。その違いは、カンバリク大都のクビライの宮殿とナタンの御屋敷に明らかであろう。また、自然や動物を主人公とする話は前者では一つとてないが、後者の各地で語られる動物たち、例えばスコトラの捕鯨の記事（Ch. 190）がどれほど迫力あるものだったかは見たとおりである。こうしてこの書は、舞台のみならず題材や内容の多様さ・豊富さにおいても、人間中心の『デカメロン』を超えて、さらに近代的な性格をもつに至っていた。

ボッカッチョはまた、内容のみならず形式の点でも新しい作家であったことが知られる。それまで散文作品は主に騎士道物語か説話であり、説話は宗教ものであれ世俗ものであれ、同じ類のあるいは様々な伝説、逸話、奇跡、伝記、由来、珍事等を集めて並べたものであった。『デカメロン』も、多くの話はそうしたものから取って来たものであるが、しかしそれらを単に寄せ集めて並べたのではなく、それに枠をはめ全体を一つの物語にした。最初に作者が、世界の様々なところでの人間とその行いを語るものであることを予告し、ペストを避けてフィレンツェ郊外の別荘に集まった男女十人にそれぞれ一日一つ、十日で計百話を語らせる。十の話がばらばらに続くのではなく、その日ごとに指定された一つのテーマのもとにそれぞれが語り手となって引き継がれ、そして全体が作者によってまとめられる。百話というのはダンテにならったもので、『神曲』も一種の枠物語になっており、ウェルギリウスあるいはベアトリーチェに導かれた作者が、地獄・煉獄・天国三界で見聞したところを、計百歌に詠ったものであった。語り手はダンテ、全体の枠は神と彼岸の世界、個々の話は三界の靈魂たちの語る罪と罰である。

こうしてたどってくると、本書もまた同じ構成になっていたことに気付かされよう。語り手はルスティケッロ、全体の枠はマルコの旅と全世界、個々の話は各地の記事である。作者は、最初にその書がマルコの旅に基づいて世界を記すものであることを予告し、その旅を序章にまとめて述べ、本編では、その見聞を旅からは切り離し、個々の土地や町ごとに一章あるいは数章を宛てて記した。つまり、各章が『神曲』の一歌や『デカメロン』の一話にあたる。また、記事ごとに語り手が顔を出して話を進行させ、読者に呼び掛ける。とこのように、本書もまた二重に物語構成になっていた。

『神曲』でダンテが「神」を、『デカメロン』でボッカッチョが「人間」を語ろうとしたとすれば、マルコ＝ルスティケッロはこの書で「世界」を語ろうとしたのだった。本書が最初に伝え、チポツラ修道士がその秘密の発見に失敗したポルチェッラーナ磁器が、西方でようやく生産され始めたのは18世紀初めのことであったが、この書が、その特権の獲得と同じほど長く700年後の今も、時と所を超えて文字どおり手に取って読まれ続けたとすれば、そのこと、すなわち世界を語る新たな物語だったからである。

- 1) 初出：『マルコ・ポーロとルスティケッロ——物語「世界の記」を読む——』近代文藝社 2016、pp. 669-85。この稿は主に、拙稿「ジパングの系譜(3)－ボッカッチョ『デカメロン』の東方」、に基づく。
- 2) 引用は全て、Giovanni Boccaccio, *Decameron*, a cura di Vittore Branca, Einaudi 1987 より。VI.10 は、第6日第10話を示す(Intr.はその日の序文)。